

市民ワークショップ

— 震災を乗り越え、よりよい小千谷を目指して —

日時：2月11日（火・祝）

午後1時～4時40分

会場：サンプラザ大ホール

当日参加者：59人

（一般52人、ファシリテーター7人）

未来を、語ろう。

市民ワークショップ

— 震災を乗り越え、よりよい小千谷を目指して —

参加者募集！

2/11 (火・祝) 午後1時～4時30分

■会場 サンプラザ大ホール

■申込先 小千谷市役所企画政策課まちづくり推進室

TEL.0258-83-3507 E-mail: plan@city.okiyo.niigata.jp

「小千谷市復興検証市民ワークショップ」 —震災を乗り越え、よりよい小千谷を目指して— 平成26年2月11日実施

1時—1時5分 開会の挨拶

常葉大学 田中聡先生(復興推進委員長)

1時5分—1時15分 これまでの経過と市民ワークショップの進め方

京都大学 牧紀男先生

1時15分—1時30分 小千谷はどれだけ復興したのか
・市民は復興の状況をどう捉えているのか

新潟大学 田村圭子先生

1時30分—4時30分 ワークショップ「小千谷は震災をどのように乗り越えたのか、
より良いまちになったのか」

全体進行:牧先生

1時30分—1時35分 導入(統計データの説明)

1時35分—3時10分 小千谷は震災をどのように乗り越えたのか?

3時10分—3時25分 (休憩)

3時25分—4時00分 10年を契機に小千谷の未来を考える

4時—4時30分 発表

4時30分~4時40分 まとめ

大塚昇一副市長

導入1

■これまでの経過と市民ワークショップの進め方

京都大学 牧先生

- 小千谷市復興計画の目標である「震災を乗り越え、よりよいまちに」なったのか、を検証する。
- 市役所に任せず市民を集めてワークショップを開催する理由は、この復興計画自体が市民みんなで作った、みんなで実行するための計画だから。
- 過去に2回の検証ワークショップを行っている。
- 2008年(H20)の時は、復興計画で何が終わって、何がまだできていないのかを整理していただいた。例えば、仮設住宅は3年で解消できたが、商店街の活性化などはできていない等の意見が出た。
- 2011年(H23)の時にも再度整理を行った。復興計画に書いてあることはほぼ完了したが、災害前からの課題が残り、さらに地域によるバラつきがあるという結論であった。
- 今回の検証を行うにあたり、小千谷の現状を示すデータをお配りしてある。例えば小千谷の人口はこの10年で約3,000人減っているが、良くなっているデータもたくさんある。
- こういったものを参考にしながら、本日はみんなで震災を乗り越えてよいまちになったのかを考えていきたい。



復興計画(短期)評価結果 残された課題(重点計画)

- | | |
|---------------------|------------------|
| ・ 1. 市民生活の復興 | ・ 4. コミュニティの強化 |
| - こどもたちが生き生きと過ごせるまち | - リーダーとなる人材の育成 |
| - 子育て環境支援 | ・ 5. 災害に強いまちづくり |
| - 若者の定着支援 | - 防災教育、訓練、仕組みづくり |
| ・ 2. 産業・経済の復興 | ・ 6. 復興の進め方 |
| - 経済の早期復興 | - 行政運営の進め方の見直し |
| - 新しい農業のあり方 | |
| - 商店街の活性化 | |
| 3. 安全・安心な社会基盤 | |

2011年(7年後)

復興計画に書かれた復興はほぼ完了した。
災害前からの課題は残り、地域によるばらつきはある

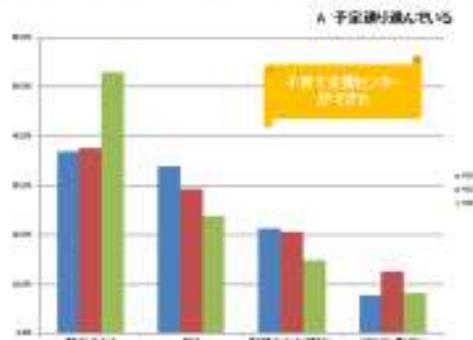
導入2

■市民は復興の状況をどう捉えているのか

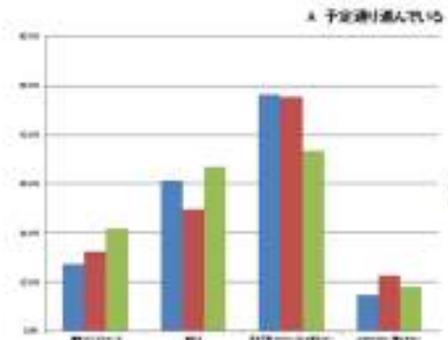
新潟大学 田村先生

- ワークショップに集まった人は小千谷市のごく一部の方だが、昨年秋により多くの市民を対象に市民意向調査というアンケート調査を行っている。市民がどのようにとらえているのかを紹介させていただくので、今日の参考にしていただきたい。
- 復興目標1の中は非常に評価が高く、特に「子育て環境の整備」について評価が高くなっている。「若者の定着支援」については評価が厳しいが、これは震災だけの影響ではないと思われる。
- 目標2では「商店街の活性化」が特に評価の厳しい項目であるが、これも震災前からの引き続きの課題である。それ以外は概ね評価は悪くないが、目標1に比べると評価が低い。
- 目標3については主にインフラの復旧であり、評価が高くなっている。前回より特に評価が高くなった「情報通信基盤の整備」については、防災ラジオの全戸配布やフレッツ光の導入など情報通信手段が改善された結果ではないか。
- 目標4では評価が高くなったもの、あまり変わらないものに分かれている。高くなった「地域の団結力、リーダーの育成」については、市内各地で市民団体が結成され活動したり、NPO法人が増えていることが評価の要因ではないか。
- 目標5では、全て評価が高くなっている。「教訓を活かし全国に貢献」については震災ミュージアムによる伝承や震災の教訓を伝える活動をしている人がいる。また、東日本大震災避難者の民泊受け入れや被災地との交流など様々な取り組みが生まれていることが評価されているのでは。
- 目標6については厳しい目標であるが、市民からの評価は高い。これからも引き続き取り組んでいかなければならない課題が多い。
- 全体的に見ると非常にポジティブな意見が多く、うまくいっているのではないかという評価である。その中でも震災前からの引き続きの課題が残っており、厳しい評価が付けられている。

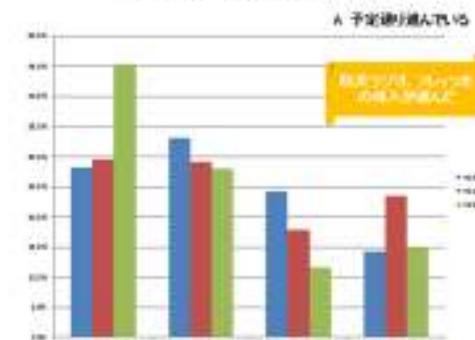
① ④ 子どもたちが、生きいきと、明るく過ごせるまちにします



② ⑤ 若者の定着のための支援を進めます



③ ⑥ 情報通信基盤の整備を進めます



セッション1 小千谷は震災をどのように乗り越えたのか

【講演①】震災の被害と避難所での生活を思い出す 長岡造形大学 澤田雅浩先生

【セッション】年表づくり

- 1-1 避難所がなくなるまで(3ヶ月)

【講演②】住まいの再建ー仮設住宅がなくなるまで 常葉大学 重川希志依先生

【講演③】生活再建ーコミュニティ再建の経験から 人と防災未来センター 渡邊敬逸先生

- 1-2 仮設住宅がなくなるまで(3年)
- 1-3 住宅再建完了から現在まで(10年)



セッション1 講演①

■震災の被害と避難所での生活を思い出す

長岡造形大学 澤田先生

- 震災発生が10月にあり、避難所が解消されたのは年末。
- 本震も大きかったが、余震がとて多くて眠れない人もいた。
- 特に山地の被害が大きかった。また、家はもちろん道路や地盤そのものの被害が大きかった。
- ちょうど県知事が変わるタイミングだったし、土曜日だったので市役所は休みだった。
- (写真を見ながら振り返る)あちこち道に大きな段差ができた、市役所には支援物資が山積みになっていた。
- 信濃川右岸の被害が大きく、妙見や東山では大規模な地滑りが起きていた。
- 避難所に行ってもガラスが割れていて立ち入り禁止だったり、すでに一杯で入れなかったりして車で寝泊まりする人もいた。
- 寒さも厳しかったが、避難所以外でも皆さん工夫しながら避難生活をしていた。
- 電気は2日目くらいから復旧が始まった。水道、ガスは時間がかかったので風呂やトイレ、調理など長期で不便だった。
- 避難先では車内が一番多かった。家が無事な人でも余震が怖くて車の中にいた人が多くいた。
- 物資については3日目くらいから手に入り始めた。
- 当時は情報を伝えてくれるメディアがあるようではなかったので、情報があまりない中での避難生活であった。



避難の状況

建物被害や火災の発生が少ない場合、自宅周辺での一時避難が行なわれた

- 安否確認や情報伝達が困難だった？
- 夜間の警戒作業も大変だった？

余震の発生により、建物内でなく「車内」での避難が選択される

- トイレの問題・→ 郊外大型店舗の避難所としての機能
- 大都市と地方都市の避難形態の抜本的な相違

セッション1 講演②

■住まいの再建－仮設住宅がなくなるまで

常葉大学 重川先生

- 当時仮設住宅に入ったのは約800世帯。
- 3年で仮設住宅が解消されたが、降雪期を考えれば実質的に1年半程度のとても速いスピードで進んだ。
- 最初は応急危険度判定を行い、全ての家に3色の紙を貼っていった。次に罹災証明を発行するための家屋調査を約半月で全ての家屋について行った。その結果、11月21日に罹災証明の発行が始まった。
- 震災ごみや家の解体撤去が課題に。市民の家前が仮置き場となり、ごみが山積みに。全国の自治体が処分に協力してくれた。また、集めたゴミは徹底的に分別・リサイクルされた。
- 全壊・大規模半壊が約1000戸。訪問調査等により870戸の仮設住宅が決定され、10月28日に着工してから1ヶ月半というすごいスピードで、降雪前に全世帯の入居が完了した。
- 仮設住宅は豪雪を想定されていなかったため、様々な問題が発生。一つずつ解決しながら生活。
- 3年後に全ての仮設住宅がなくなった。これは他の災害と比べても非常に速いペースだった。766世帯のうち、かなりの割合(78%)の方が何とか直したり建て替えたりした。
- 住宅応急修理制度は仮設住宅に入らないことを条件に修理費を助成する制度だったが、応急修理だけではなく恒久的な修理の一部として活用できた。
- 十二平や塩谷など地盤被害の大きい地域は、これからの生活の事も考えて、約80世帯が安全な平地への集団移転を行った。また、災害公営住宅も作られ、そこに入居される方がいた。
- このように、それぞれ仮設住宅解消に向けた取組がされていった。

特別豪雪地帯での住宅再建

- ✓雪との闘い
- ✓想定外のことがばかり
- ✓積雪期が半年ある中での調査・工事
- ✓実質的には1年半で仮設住宅が解消された
- ✓市民、行政、ボランティアの共働

り災証明書発行

平16年11月21日～平16年11月24日
(サンブラザ)



仮設住宅の閉鎖＝住宅の再建 平19年10月23日(3年目)

新築	375世帯
修繕	197世帯
中古住宅購入	26世帯
公営住宅入居	113世帯
借家・アパート	49世帯
その他	16世帯
計	776世帯

■セッション1 【みんなの年表】 この時期にがんばったこと、つらかったこと A班

【凡例】

- がんばったこと
- つらかったこと
- 両方あったこと

	平成16年10月		11月		12月						
第一期 (3ヶ月まで)	住居 余震が怖くて車中泊が続いた 町内会長としての避難所運営 高齢者がいたのでビニールハウスに住んだ 自宅の被害・改修の遅れ		ライフライン 風呂に1週間入れなかった 無料で風呂に入れてくれた トイレや調理に困った 飲み水確保 携帯で連絡できない		外部からの支援 多くの応援と交流 レンタカーで帰った 地元になくて何もできなかった		片付け 自宅片付けを1人で		地域活動 寺社の再建 仮設住宅への連絡		
			ボランティア 消防団活動		食事 食べ物の偏り 身を寄せた家族の食事の用意		仕事 支援物資の運搬 職場での泊まり込みの仕事 単身高齢者の住宅補強で喜んでいただいた				
	平成17年		平成18年		平成19年						
第二期 (3年まで)	大雪 除雪を頑張った 仕事や生活への影響		余震 余震の不安		仕事 無休で労働、体力の限界 転職		建物の修繕 自宅や作業所の新築 修繕費による金銭的負担		コミュニティ再建 地元神社の再建		
	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年				
第三期 (10年まで)	家族 子育て 家族の手術		子育てと仕事 自分の体調不良と家族の病気		子供が成長してからの影響が心配		ペットでボケ防止				
	コミュニティ再建		同窓会開催		十二平の震災記録誌作成		農村体験受け入れが楽しい				
	仕事 建物解体マニュアル作り						抛り所として農家レストランオープン				
A班: 広井年郎、羽鳥武芳、和田雅浩、杵渕カズエ、風間啓充、雨木香奈子、石曾根徹、田中健											

■セッション1 【みんなの年表】 この時期にがんばったこと、つらかったこと **B班**

【凡例】

がんばったこと

つらかったこと

両方あったこと

	平成16年10月		11月		12月				
第一期 (3ヶ月まで)	避難生活 車中泊 テントで寒さをしのぐ 風呂や食料の確保 友人宅の倒壊 避難所のトイレ清掃 住民への対応		協力 仲間の自宅訪問 町内避難の手伝い みんなで食事準備 避難所ボランティア 募金 夜間の見回り		不安 余震 無力感 家族のメンタル対策、PTSD 家族の入院 知人の安否や関係者の被害		交通 道路の封鎖 遠距離の通勤	外からの支援 日赤、警察、ボランティアセンター等	情報 被災地外の人との温度差、孤独感、喪失感 友人に状況を発信
	平成17年		平成18年		平成19年				
第二期 (3年まで)	大雪 震災後の雪害 大雪のつらさを分かってもらえない		復旧 田んぼの復旧		コミュニティ 多くが地域外に移住してしまった		家族 家族のケア	コミュニティ再建 闘牛の復活 住民団体の結成・活動スタート	中越沖地震 ボランティア参加 家庭訪問
	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年		
第三期 (10年まで)	伝承 飲みにケーション	SOS雪おろし隊	民泊受け入れ 中越大震災の教訓を語り継ぐ	東日本大震災支援 地震を他人事と思われると腹が立つ	ボランティア・支援 防災学習のプログラム作り	続く被災地支援 植葉プロジェクト等			
	地域活性化	地域内商店廃業 地域復興計画作成	直売所・惣菜店 NPO法人設立	東地区にスーパーがオープン	東小千谷さわやかウォーク開催	かぐらなんぼんの 新商品開発	東小千谷商店街の衰退		
B班: 高野真弓、渡邊勝文、渡邊敬逸、佐藤隆一、金井信雄、小宮山一博、木村茂穂						風化 加齢 経年による忘却			

■セッション1 【みんなの年表】 この時期にがんばったこと、つらかったこと C班

【凡例】

がんばったこと

つらかったこと

両方あったこと

	平成16年10月		11月		12月							
第一期 (3ヶ月まで)	コミュニティ コミュニケーション 避難所を明るくする雰囲気づくり 小千谷を離れたくない 家族との協力体制 お寺の片付け		ライフライン 風呂に入れない 復旧までの水汲み 1日1食 必要物資が来ない 車中泊 ガソリン不足		情報不足 電話が通じない 家族の近くにいられない 情報が入らない すぐ帰れなかった 東京に小千谷の情報が入らなかった		支援対応 子供を守ること 実家から通勤 物資を持っていく 実家片付け手伝い なんとか帰省して手伝い		仕事が大変 休む暇がない 眠れなかった 仕事の対応で家に帰れない 余震の中でのオムツ交換 直後の食事作り		避難所対応 何もすることがない 障がい者の方の避難先確保	
	平成17年		平成18年		平成19年							
第二期 (3年まで)	大雪 大雪が大変だった 消雪パイプの不良		仕事 会社設立		新しい活動 農産物によるコミュニティビジネス 大学生との交流		コミュニティ再建 闘牛復活 家族のケア		住宅再建 家のリフォーム		中越沖地震 様々な支援 ガス工事の応援	
	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年					
第三期 (10年まで)	新しい活動 民泊受け入れ JICA研修生の民泊受け入れ		小千谷にUターン		新しいお店がオープン 東小千谷小の民泊開始 住宅新築		東日本大震災 避難所運営 避難者の受け入れ 様々な支援と交流 仮設住宅を作りに行った		風化 忘れられている		若者 若者のつながりから仕事づくり	
	C班：風間詠子、黒崎智大、齊藤まみ、樋口栄子、細金創、阿部政昭、野澤敏											

■セッション1 【みんなの年表】 この時期にがんばったこと、つらかったこと D班

【凡例】

- がんばったこと
- つらかったこと
- 両方あったこと

	平成16年10月		11月		12月		
第一期 (3ヶ月まで)	家族の状況 パジャマを着て寝れない 家族の大ケガ 家族や町内と協力		避難方法 家の外で一夜を過ごし寒かった 村からの脱出方法 ヘリに乗る順番		情報不足 東京に小千谷の情報が入らなかった 電話料が安かった		片付け 自宅の片付け お酒 飲み会がなくなった レクリエーションできない 先への不安 先が見えない 仕事 復旧業務
	身体(健康) ゆっくり寝ること		避難所での活動 トイレ掃除 避難所のボランティアリーダー 炊き出し トラブル対応 村に帰る話し合い		精神的・肉体的な過労 余震等で睡眠不足		
	平成17年		平成18年		平成19年		
第二期 (3年まで)	大雪 情報不足 小千谷の情報が取り上げられない		NPO活動 NPO法人設立 仮設住宅に物資配布		復興イベント 復興イベントの開催 おぢやまつり 明るい雰囲気になった		災害ボランティア 中越沖地震支援 経験・情報の発信 小千谷の震災風化 様々な不安 再発の不安 PTSD 経済的不安
			集団移転 家の移転新築 土地の区割り 支援のお礼				
	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年
第三期 (10年まで)				東日本大震災 避難者の支援 交流につながる人脈づくり	コミュニティ活動 集落の一員になるように コミュニティの在り方を考える	家族の大切さ 自然が多い地域では家族が大切	
	D班: 木島良、若林和枝、桑野敏久、鈴木俊郎、渡邊智行、大矢敏之						

■セッション1 【みんなの年表】 この時期にがんばったこと、つらかったこと E班

【凡例】

がんばったこと

つらかったこと

両方あったこと

	平成16年10月		11月		12月		
第一期 (3ヶ月まで)	余震 余震の不安 車中泊 寝付けない	近所付き合い 近所の避難手伝い コミュニケーション 知人の安否確認 鍋で米を炊いた 物資を分けた 地域間の不公平感	地域活動 防犯活動 物資の配布手伝い 近所の取りまとめ役	仕事関係 仕事を頑張った 事業所の立て直し 仕事のため家にいられなかった トラブル対応	通信移動 道が壊れて移動できない 携帯つながらない	家族の死 親の死	
	平成17年		平成18年		平成19年		
第二期 (3年まで)	大雪 大雪の対応 雪おろしの回数増 通勤に時間がかかる	地域の復旧復興 農地等の復旧 近所を知る	メンタル 落ち着いてきた頃に子供に影響が出た	生活と仕事 被災を生活に活かす	新しい活動 中学生民泊受け入れ	中越沖地震 原発に対するリスク	
	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年
第三期 (10年まで)				東日本大震災 避難者の支援 民泊受け入れ 東北支援物産展等支援イベント	放射能の脅威 被災地からの恩返しプロジェクト そなえ館オープン	地域の衰退 地元小学校閉校	
	E班: 平野賢次、勝野まり恵、竹内義朗、金澤耕作、阿部正行、小川晃、羽鳥勝弥						

■セッション1 【みんなの年表】 この時期にがんばったこと、つらかったこと F班

【凡例】

- がんばったこと
- つらかったこと
- 両方あったこと

	平成16年10月		11月		12月			
第一期（3ヶ月まで）	ライフライン トイレに困った 風呂に入れない 一杯で避難所に入れなかった 長岡まで買い出し 炊き出し	情報不足 情報が得られず何もできなかった 自分で情報を得るようにした 安否確認 避難所や病院を飛び回った	不安 余震で眠れない 夜に向かって不安に これからどうなるのか もう村に戻れないと思いつつヘリに乗った	仕事関係 無我夢中で働いた 片付け 家族が家の片づけをがんばった	避難所での活動 避難所でのボランティア 人のつながり 友達の大切さ			
	平成17年		平成18年		平成19年			
第二期（3年まで）	復興イベント 震災を乗り越えるためのイベント開催 震災に対する温度差や壁があった	コミュニティ活性化 コミュニティ法制化 東山地区との交流 東夢協による東小千谷の活性化	体験の発信 県外に人に震災の様子を伝える 震災大変でしたねと声を掛けてくれた	高齢化の進行 山間地だけでなく市街地も高齢化 若者の小千谷離れ	中心市街地衰退 商店街の衰退 全国的な問題	記憶の風化 記憶が薄れて大変だと思わなくなった 二重ローン		
	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	
第三期（10年まで）	新しい活動 新しいビジネス、山菜王国の立ち上げ 地場農産品の収穫祭開催 若者が就職しない	地域団体の立ち上げ 地域を越えたイベントの開催 復興支援員としての支援		東日本大震災 避難者の支援 支援物資 ボランティア	炊き出し 震災でいただいた優しさの恩返し			市民の頑張り 10年になっても震災を忘れずに頑張っている
F班: 中山節夫、吉崎進、荻野歳男、星野佑磨、池哲太郎、横山博行、竹田通子								

■セッション1 【みんなの年表】 この時期にがんばったこと、つらかったこと G班

【凡例】

- がんばったこと
- つらかったこと
- 両方あったこと

	平成16年10月		11月		12月							
第一期 (3ヶ月まで)	ライフライン お風呂・トイレ 復旧の遅れによる生活の困難 おなか一杯食べられない 食糧調達 工夫して炊き出し		車中泊 身体が伸ばせない 仕事のせいで1週間缶詰め 情報 ネット、メディアを通じて支援を呼びかけ		家族・地域 無事だった 家族が震災うつに 代わりに家事をした 子供遊ぶ声で心が和らいた 集まって避難したので安心だった		ボランティア 自分のスキルが役に立った 取り組みを理解してもらえた 何を優先すべきか 疲れたと言えなかった		募金 行政から協力を得ることができた 高齢者宅の片付け 支援活動をマイナスに評価された		学校 学校行事の中止 進学できなくなった 進路変更 夢がなくなった	
	平成17年		平成18年		平成19年							
第二期 (3年まで)	雪害 大雪への対応 雪下ろし回数増 道路の補修が追いつかず、雪道が大変		仕事 進学をやめて、就職することを決意 地元企業に就職・転職した		家族 生活が安定してきた 新生活・引っ越し 夏休みの子供たちの居場所 実家への送金 震災うつによる家族の離婚		復旧 農地の復旧 家屋の新築・補修完了		中越沖地震 ボランティア活動 支援活動 仕事で家に帰れない			
	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年					
第三期 (10年まで)			生活 家の新築 若者 青年たちの居場所づくり(勤少ホーム)		FM放送 こいこいおぢやプログラム放送開始～現在放送中 東日本大震災 ラジオによる震災情報番組の生放送 震災の記憶がフラッシュバックし倒れる		子供 子供の進学が決まる					
	G班: 小泉和弘、羽鳥賢一郎、小川洋平、齊藤文佐輔、新保正文、丸山結、加藤圭											

■セッション1-1【みんなの年表】

全班まとめ

この時期にがんばったこと、つらかったこと

第1期～避難所がなくなるまで(3ヶ月)

		平成16年		
		10月	11月	12月
頑張ったこと、辛かったこと	身体・健康	体調変化、不眠等 家族の安否	外部からの支援	避難所での活動
	住居	自宅の被害	支援物資、炊き出し 大勢のボランティア 自衛隊等の支援 支援を通じた交流	助け合い トイレ清掃等当番 ボランティアの指揮 やることがない 子供を守る 情報の積極的な確保
	避難生活	余震が怖くて車中泊が続いた 避難所に入れない ビニールハウスやテントで寝泊まり 体調変化、不眠等	片付け	生活弱者への対応 今後について皆さんと話し合い 避難所でのトラブル 飲み会が無くなった 子供の遊び場 明るい雰囲気作り
	ライフライン	電気、ガス、水道 トイレ、風呂 無料で風呂に入れてくれた 道路、ガソリン 携帯が繋がらない	不安	
	コミュニティ	近所集まって食事を作った 安否確認 友達の大切さ 募金活動 ネットメディアでの情報発信	自宅片付け、補修 高齢者宅の片付け ボランティアの支援	メンタルの低下 辛さを分かってもらえない 家族・知人の死 子供の遊ぶ声で心が落ち着いた
		様々な「我慢」 通信・移動困難 情報が不足 町内会長としての避難所運営 孤立集落の避難	仕事への影響	
			自分のスキルが役立った 実家に手伝いに帰った 支援活動を理解してもらえなかった	震災復旧業務 休む暇がない 単身高齢者の住宅補修をして喜んでいただいた

【凡例】

- がんばったこと
- つらかったこと
- 両方あったこと

■セッション1-2【みんなの年表】

全班まとめ

この時期にがんばったこと、つらかったこと

第2期～仮設住宅がなくなるまで(3年)

		平成17年		平成18年		平成19年	
		1月～6月	7月～12月	1月～6月	7月～12月	1月～6月	7月～12月
頑張ったこと、辛かったこと	<p>豪雪</p> <ul style="list-style-type: none"> 除雪、雪下ろし 除雪業務 道路の補修が間に合わない 消雪パイプ等不良 通勤・生活への支障 雪国のつらさを分かってもらえない 	<p>復旧</p> <ul style="list-style-type: none"> 農地の復旧 職場の復旧 新築・転居 生活の復旧安定 	<p>文化の復活</p> <ul style="list-style-type: none"> 闘牛の再開 地域行事の再開 	<p>集落転出</p> <ul style="list-style-type: none"> 集落からの転出者増加 人口減少 集団移転 土地の区割り 	<p>中心市街地の衰退</p> <ul style="list-style-type: none"> 商店街の衰退 全国的な問題 	<p>中越沖地震への支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ボランティアで支援 恩返し 被災経験の活用 仕事で家に帰れない 地震再発の不安 原発リスクの不安 	
	<p>新しい活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 会社設立 NPO法人の設立 就職・転職 	<p>復興イベント</p> <ul style="list-style-type: none"> 復興イベントの開催 乗り越えようとする活力・元気の創出 	<p>支援への感謝</p> <ul style="list-style-type: none"> 祭りを盛り上げた 震災イメージの払拭 	<p>高齢化の進行</p> <ul style="list-style-type: none"> 山間地だけでなく市街地も高齢化 若者の小千谷離れ 	<p>体験を他地域の人に伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> 小千谷に転入 婚活 	<p>大学生との交流事業</p> <ul style="list-style-type: none"> 中学生民泊の受け入れ開始 	
	<p>心のケア</p> <ul style="list-style-type: none"> うつ・PTSD・恐怖 子供や高齢者のメンタルケアニーズ 続く余震 	<p>被災地格差</p> <ul style="list-style-type: none"> 精神的な温度差 小千谷の情報が取り上げられない 	<p>経済的不安</p> <ul style="list-style-type: none"> 住宅の修繕費等による負担増 二重ローン 	<p>風化</p> <ul style="list-style-type: none"> 記憶が薄れていく 小千谷の被害の風化 中越大震災そのものの風化 	<p>ファンクラブ設立</p> <ul style="list-style-type: none"> コミュニティビジネス 	<p>【凡例】</p> <ul style="list-style-type: none"> がんばったこと つらかったこと 両方あったこと 	

■セッション1-3【みんなの年表】

全班まとめ

この時期にがんばったこと、つらかったこと

第3期～住宅再建完了から現在まで(4～10年)

	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年
頑張ったこと、辛かったこと	家族との絆 子育て	高齢家族のケア	子供の成長	家族の大切さを実感	子供の精神的影響が心配	ペットを心の慰めに	加齢
		地域の復興計画の策定 中山間地域のこれからを考える	教訓の伝承 体験・教訓を語り継ぐ	震災記録誌の作成	防災メモリアル施設のオープン	住宅解体マニュアル作り	防災学習のプログラム作り
		地域の活性化のために 住民団体の立ち上げ、活性化 NPO法人の増加	地域の拠り所オープン 地域を越えたイベント実施	FMラジオによる地域情報の発信 各地域での活性化事業	若者の居場所作り 子供が楽しく遊べる場を作る	記憶の風化 中越大震災が忘れられている 震災の体験を忘れず頑張っている	
	新しい活動 研修生や中学生の民泊受け入れ	農家民宿など新しい事業開始	少しずつ新しいお店がオープン	東地区にスーパーがオープン	地元食材を活用した商品の開発	農家レストランオープン	若者の繋がりを活かした仕事作り
	【凡例】 がんばったこと つらかったこと 両方あったこと	飲みにケーション 関係者や同級生等とのコミュニケーション再開	地域の復興計画の策定 中山間地域のこれからを考える	東日本大震災被災地支援 被災者の民泊受け入れ 恩返し	被災地での支援 避難所の運営 支援後も続く交流	生きている事が幸せ フラッシュバック	募金やイベント開催など様々な形で続く支援 放射能の脅威
	拠り処の喪失 地域内の商店が廃業		中心商店街の衰退が進行		地域内の小学校が閉校		

セッション2 10年を契機に小千谷の未来を考える



班ごとの発表



セッション2【キャッチコピー作り】

小千谷の未来の姿を語ろう！

A班	B班	C班	D班
<p>小千谷愛 ～絆への感謝を忘れずに～</p>	<p>しぶとい、未来の扉は自分で開く、 また訪れたい、アイデアあふれる、 ゆりかごから墓場まで、災害への備えを学び実証する、 みどりの長寿シティ=小千谷</p>	<p>生涯楽しく住める”まち” 小千谷を、世界に発信!!</p>	<p>多世代で目指す、 「待ってる」から「攻める」へ</p>
<p>小千谷の良さをPRしファンを増やす</p> <p>被災地への支援を継続、助け合う</p> <p>地域の絆と元気を取り戻すようなまちづくり</p> <p>住宅の耐震化などの防災対策</p> <p>小千谷自慢ができる郷土愛</p> <p>健康な体づくり</p> <p>家族の絆を深める</p> <p>高齢者の生きがい</p>	<p>交流人口の増加ふるさとと感じてもらえるように</p> <p>若者の新しい試みを支援 頑張る人を応援</p> <p>防災体験や環境教育など、地域の資源を伝承</p> <p>地域活動やボランティア、NPO活動の継続</p> <p>地域コミュニティ充実による過疎対策支援</p>	<p>地域に根差したビジネスを</p> <p>高齢者が暮らしやすい安心を</p> <p>市民の力を活かし、活力あるまちに</p> <p>通信網の整備とITリテラシー</p> <p>交流を活発に</p> <p>地域に参加する、交流する若者を増やす</p> <p>子供から高齢者まで誰でも暮らしやすいまちに</p> <p>市民が小千谷の事を知り、宣伝できるように</p>	<p>魅力を高めて交流人口を増加</p> <p>全国から来るまちを目指し、全市での祭り、イベント実施</p> <p>雪の利活用</p> <p>「ならでは」の魅力を作り、発信</p> <p>中山間地域の活性化</p> <p>錦鯉を市内に泳がせてPR</p> <p>若者が夢を語りまちづくりに参加するまちに</p> <p>防災スペシャリストの育成等による災害経験の伝承</p>
E班	F班		G班
<p>人とのつながりを大切に みんなが大好きなおぢやへ ～若者の定着を目指す～</p>	<p>小千谷のよいものを自慢していこう ～ex.ちぢみをオリンピックへ～</p>		<p>夢咲くおぢや ～いつでも、今日が、いちばん、楽しい日!!～</p>
<p>震災体験を子供たちや他地域の人に伝える</p> <p>企業誘致による雇用の安定化</p> <p>小千谷の魅力を知り、伝えること</p> <p>地域の繋がりを大切にする</p> <p>小千谷の若者が帰ってきて定着する拠点作り</p> <p>特産品を拡販して海外へ</p> <p>若者の活力で困難を乗り越える</p>	<p>地場産業や特産品を発展させ、販売する</p> <p>人とたくさん出会えるまちに</p> <p>医療と福祉のまちを目指す</p> <p>東日本大震災被災地の目標となるまちに</p> <p>次世代へ震災の記憶を継承</p> <p>人と人の繋がりやコミュニティを大切にし、交流を増やしていく</p> <p>住んでいることが自慢できるように</p>		<p>県内外の人との交流</p> <p>次世代リーダーの育成や教育</p> <p>雇用を作り、小千谷で仕事ができる環境づくり</p> <p>転入者や定住者による人口増</p> <p>魅力や震災の教訓など、様々な情報発信</p> <p>小千谷で家族を作り、生きていく</p> <p>子育て世代に優しい福祉の充実</p> <p>地域の課題を共に解決する住民団体の充実</p>

ワークショップのまとめ

【事務局より】

■小千谷市 大塚副市長

- 復興計画は26年度で終了するが、残された課題を市の最上位の計画である総合計画に反映していきたい。皆さんから高い評価をいただいたので、さらに小千谷市が素晴らしいまちになるようにこれからも頑張っていきたい。

【講師から一言】

■人と防災未来センター 渡邊先生

- 人口は減っているが、コミュニケーションを密にすることによって人と人の絆が感じられるようなまちにしていってほしい。

■長岡造形大学 澤田先生

- 今まで10年間話し合いを積み重ねてきた成果が表れている。3枚の年表は秀逸な特徴が出ているのでは。1枚目は被災した直後で自分の事として捉えている。2枚目では復旧が進むにつれて少し他人事として捉え始めていたのが、3枚目の東日本大震災によって振り返り、他人事ではなくみんなの問題だと改めて認識したことが表れている。
- キャッチフレーズには皆さんの決意が表れていると思うので、他の班に負けないように、これから10年間の目標としてそれぞれ頑張っていきましょう。

■常葉大学 重川先生

- 震災から生まれた「ネットワークおぢや」の取り組みが防災まちづくり大賞の総務大臣賞を受賞する、という素晴らしい成果が生まれた。被災自治体としての経験を次の災害に備えるために始めた行動が、全国の自治体から賛同を受けている。市民の皆さんからもぜひ知っていただきたい。

ワークショップのまとめ

【講師から一言】

■新潟大学 田村先生

- 県内にも色々な災害による被災自治体がたくさんあるが、市民の意見を聞いて復興計画を作り、こつこつ真面目に3年ごとに検証を進めてきたのは小千谷市だけである。10年経って、その成果が表れているのではないか。県民の一人としても誇らしく思う。
- 素晴らしいキャッチコピーがたくさん出たので、これから大切にしていってほしい。

■京都大学 牧先生

- 若い方から地域を支えてきた年代の方まで、様々な人が同じテーブルで議論ができる小千谷になっていることは本当に素晴らしいし、とてもうらやましく感じた。「震災を乗り越えて、よりよい小千谷を目指す」ことが復興だとすれば、こんな素晴らしいメンバーで議論できたということで達成されたのでは、と感じている。

■常葉大学 田中先生

- 震災から10年近くが経過し、意見がなかなか出ないのではないかと心配していたが、非常に活発な意見が出て素晴らしかった。やはり関心の高さが表れていると思う。
- 今日の結果は、昨年8月に市内の小学校を対象に行った子供ワークショップの結果と比較的近い内容が多い。皆さんも子供たちも、同じような方向性でこの10年を見つめているのではないか。
- 昨年10月の市民意向調査の中で「復興感」について聞いている。生活に関する震災の影響については、2/3以上の方が「おおむね影響がなくなった」と回答している。市の全体的な復興状況については、8割以上の方が「おおむね復興した」と回答している。今日の話し合いを見ても、震災復興という段階から次の新しい段階に進んでいることが分かってきたのではないか。多くの方から賛同いただけるように感じたので、今後の検証の取りまとめもそのような方向で進めていきたい。

■参加者の感想(抜粋)

- 復興について、改めて考えさせられた。
- 幅広い世代の、業種の異なる人が集まり楽しく意見を交わすことができた。
- 初対面とは思えないほど皆さん笑顔で会話しながら進めることができた。
- 皆さん意見が前向きで素晴らしかった。
- 10年が経ち、当時を思い出すのは大変だった。
- 震災を直接経験していないが、小千谷の将来を考えることは有意義だった。
- 小千谷市民は皆、小千谷を心から愛していると感じた。復興のモデルになれるのでは。
- 小千谷人は奥ゆかしい気質だが、震災でスイッチが入ったのではないか。
- 思い出話と夢を語るだけでは意味がない。気持ちの高揚感だけでなく、具体的な策を実行させないと自己満足で終わってしまうのでは。
- どうせやるなら、時間も内容も深みのあるものを行った方がよいのでは。
- 分科会のようにしてもっと突っ込んだ話ができればまた参加したい。
- 小千谷の未来のために、市民と行政が一体になる方法を考えなくてはならない。
- これからも市民の意見を述べる機会があってもよいと思った。
- 若者の定住する小千谷を、力を合わせて作っていきたい。
- 次の災害に備える人づくりの時期に来ていると思う。
- どの年代の人でもそれぞれ楽しめる街になっていくようなまちづくりをしなければ。
- まちづくりには大きな改革が必要。これから積極的に関わっていきたい。
- 今日グループで考えたことを実践できるよう、自分も市民の一員として取り組みたい。

■ワークショップのまとめ — セッション成果物から読み取ったこと

■セッション1

- 震災の直接的な影響は、ライフラインの不便や避難生活での苦労など最初の3ヶ月に集中していた。
- 時間の経過や復旧の進み方とともに、つらかった思い出が少なくなり、前向きな思い出や新たな活動が増えていく。
- つらかったこととがんばったことは表裏一体であることが多い。
- 震災で負った様々な精神的不安は多岐に渡っており、家族であっても一定ではない。3年を経過しても、PTSDやフラッシュバックに悩む人もいる。
- 最後に残る課題は、震災に関係なく以前から引き続く問題であるが、震災によって顕在化したり進行したものが多く。

■セッション2

- 日頃自ら進んでアピールすることは少ないが、確実に地元愛が強い。
- キーワードBEST5は「若者」、「魅力をPR」、「人・地域の絆」、「教訓の伝承」、「交流」。おぢやらしさを確立し、積極的にPRすることが一番のカギになるのでは。
- 「災害」や「復興」というようなワードは出てこなかった。前向きな言葉が多かった。
- セッション1との関連性をもう少し工夫できればよかった。

■全体を通してのまとめ

- 幅広い世代が意見を交わしながら、和気あいあいと取り組む姿が素晴らしかった。
- 全ての参加者が真面目に取り組み、小千谷のことを何とかしたいと考えてくれたことに感動した。
- 参加者の感覚として、震災からの復興については全体的に完了したと考えているようであった。未来を言葉で表したときに「災害」や「復興」といったものが出てこなかったことから伺えるのでは。
- 参加者の感想にあったように、いかにこの想いを繋ぎ、具体的な形にできるかが肝心だと考える。